

資料館だより

発行所

高松宮記念ハンセン病資料館
 〒189 東京都東村山市青葉町4-1-13
 電話 0423-96-2909
 FAX 0423-96-2981
 郵便振込 00130-7-764159
 高松宮記念ハンセン病資料館運営協力会

転機の年

資料館運営委員長 成田 稔

ハンセン病資料館も、これぞ三回目の新年を迎える。近頃は、一年か二年の間をおいて再度資料館を訪れる人も間々いるが、たいていは「前に見たから……」と言いながら、見損なったビデオくらいは見ても、あとは二階の展示場の入口に立つだけで、わかったような気になるらしい。

どちらにしても、三年目に入ると再度ここを訪れる人が増えそうだが、そのような人々にとって、「前にも見た」のではなしに、「改めて見直した」思いが持てる展示場を目指したい。もっとも、展示品には限りがあるから、見学者の視角を変えらるなどして、初めて見たように印象付ける工夫も必要である。

大切なことだが、資料館はここを訪れる人のための



謹賀新年

ものだから、それらの人々が資料館に何を求めているか、もっと積極的に聞き出すのが先決かもしれない。

もし、私たちがそのような声に応えられれば、資料館はいつまでも多くの人々に守られながら、確かな育ちを続けるだろう。

三団体で
 らい予防法特集号
 日患同盟、全患協、全医

労共同編集(11月6日付)号の新聞が発行された。

一面はらい予防法特集号
 ▼踏みにじられた人権回復へ▼強制隔離九十年「らい予防法」見直しが山場▼医療介護の充実今こそ、など
 の見出しと共に、関係者の声が多数掲載されている。

本年もどうぞよろしく
 お願い申し上げます

- | | |
|--------|--------|
| 資料館館長 | 大谷 藤郎 |
| 運営委員長 | 成田 稔 |
| 運営委員 | 村上 国男 |
| 同 | 大竹 滋 |
| 同 | 神崎 正男 |
| 同 | 大和田喜一 |
| 同 | 鈴木 修幸 |
| 同 | 平沢 保治 |
| 同 | 山下 道輔 |
| 同 | 大竹 章 |
| 同 | 佐川 修 |
| 資料館館員 | 川島 義教 |
| 同 | 平野 洋子 |
| 同 | 屋嘉部美智子 |
| 同 | 佐々木敬子 |
| 同 | 宮下 金次 |
| 同 | 岡本 正巳 |
| ボランティア | 菊池 誠 |

らい予防法 廃止に

厚生省の検討会が報告書

厚生省の「らい予防法見直し検討会」は、昨年十回に亘る討議を重ねた結果、十二月八日報告書を取りまとめ発表した。

同日夜の各テレビ局のニュース、翌九日朝の各新聞は、一斉にこの問題を大きく取り上げ報道したが、

その中から朝日新聞の記事を転載して紹介する。

ハンセン病患者の強制隔離を規定し、患者・家族への偏見、差別を助長した「らい予防法」の見直し問題を協議してきた厚生省の「らい予防法見直し検討会」(座長＝大谷藤郎・財団法人藤楓協会理事長)は八日、予

来年の通常国会へ

「らい予防法」の廃止を求める報告書をまとめた。

厚生省は、ハンセン病療養所の入所者の医療・福祉を保障する条項を盛り込んだ「らい予防法廃止法案」を来年の通常国会に提出する。

医学の常識や国際的な潮流に逆行する「隔離政策」の根拠となった法律は、一九〇七年(明治四十年)の旧法制定から九十年近くを経て、ようやく姿を消すことになった。

あるとして、国費による医療提供、家族への援護、障害年金一級に相当する給与(月額八万一千八百二十五円)の支給など、生活全般に及ぶ施策をこれまで通り続けるよう求めている。

その理由として報告書は

「らい予防法」については、国立ハンセン病療養所の所長連盟が昨年十一月、日本らい学会が今年四月、それぞれ廃止を求める見解を発表した。廃止を求める医学界などの動きを受けて、厚生省は七月、医師や法律家、全国ハンセン病患者協議会代表らからなる検討会をつくり、法律の廃止に伴う問題点などを話し合ってきた。

「らい予防法」については、国立ハンセン病療養所で生活する約六千人の入所者に対しては、「社会全体の責任として、一般社会保障制度とは異なった特別の政策上の配慮が加えられるべき」で

①入所者の平均年齢が七十歳に達し、ハンセン病は治療しても視覚障害や肢体不自由などの後遺症がある

②根強い社会的偏見・差別によって、多くの入所者が家族と縁を切ったり、結婚に際し優生手術を受けたため、根強い偏見・差別の解消が進まず、入所者らに精神的な苦痛を与えてきたことについて、反省の意を表明する意向を固めた。

また、法律・学術用語としての病名を、偏見がつきまとう「らい」という言葉からハンセン病に言いかえるよう求めるとともに、ハンセン病への正しい理解を促すための啓発活動や教育の必要性を訴えている。

入所者らに 反省表明へ

森井厚相が意向

森井忠良厚相は八日、

らい予防法廃止の方針決定にともなう、ハンセン病療養所の入所者の代表らに直接会い、ハンセン病が治癒可能な病気と判明した後も同法を改正しないまま放置してきた

森井厚相が施設を訪問するか、全国の療養所入所者の代表を厚生省に招いて、反省と感謝の言葉を伝える。

また、優生保護法(医師の認定によるハンセン病患者の優生手術)や出入国管理及び難民認定法(ハンセン病患者の入国拒否)の規定も同時に削除される。



ハンセン病資料館 一九九五年のあゆみ

昨年は「らい予防法」にゆれた一年といえる。テレビや新聞、雑誌などでハンセン病問題が、これ程多く取りあげられたことはかつてないことであった。

厚生省の「らい予防法見直し検討会」の報告書も出され、今年の春には何らかの新しい法律(案)が示されるものと広く期待されている。

資料館も早や開館二年半となり、入館者も昨年11月で二万三五〇七人に達した。そのうち団体は三四二団体一万一〇三一人で全入館者の四七%を占めている。

次に資料館昨年一年間の主な行事を記すと、

- ▼青葉小学校86人の「ハンセン病新聞展」 2月22日
- ▼菊池恵楓園、琵琶崎待勞病院、昔むかし写真展 4月18日〜6月30日

▼資料館二周年記念フォーラム「ハンセン病の歴史を探る」 6月25日

▼第二回全国精神障害者との交流会 8月6日

▼厚生省「らい予防法見直し検討会」と全患協「らい予防法対応委員会」の懇談会 8月10日

▼全生園看護学校「ハンセン病の明日を考える展」 10月27日

11月26日

▼関連事項

・「ハンセン病特別展示室」設置

・「テレホンカード」発行

・「ハンセン病資料館」発

行

・「柘の垣はいらない」出版記念会

・「東村山三十景」標設置



団体客で賑わう、一階受付ロビー

・「NHKTV」心の垣根をなくしたい」放映

以上だが、その他にも各テレビ局、新聞社などの取材も多く、特に10月は二十団体八二人の入館者があり、館内は大賑わいだった。

回春病院百周年

熊本で記念事業

英国女性ハンナ・リデルがハンセン病患者救済のため、熊本市に開設した回春病院(昭和十六年閉鎖)の開院百周年記念事業が11月20・21日の両日、リデル、ライト両女史顕彰会、熊本日日新聞共催で、映画、シンポジウム、講演などが多彩に行なわれた。

20日は鶴屋七階ホールで映画「小島の春」を上映。午後には猪飼隆明熊大教授、藤本桂史・リデル・ライト両女史記念館々長、平沢保治・高松宮記念ハンセン病資料館運営委員、由布雅夫・菊池恵楓園々長が参加してシンポジウムが開催され、患者の強制隔離を目ざしたらい予防法、偏見差別の問題等の話に三百人余の参加者は真剣に聞き入った。

21日は黒髪のリデル・ライト両女史記念館で午前中記念祭と式典、その後レイド・ポイド駐日英国大使夫人による記念講演会「リデル女史が後世に残したもの」が行われた。

「柘のトゲ」が特選

東京都作文コンクール

読売新聞社主催の第45回全国小・中学校作文東京都コンクールで、聖徳学園小学校(小平市)六年あさかぜ組の吉野かえでさんが、全生園、資料館、らい予防法のことなどを書いた「柘のトゲ」が特選に入った(10月26日)。

「しあわせの風見鶏」

熊本日日新聞が連載

熊本日日新聞では10月に「しあわせの風見鶏」と題して約一ヶ月間、菊池恵楓園を連載で紹介した。

強制収容、断種、黒髪校事件、藤本事件、らい予防法、宗教、生活など、ハンセン病療養所の核心をつく諸問題をとりあげ、偏見差別の解明にせまっている。

「しあわせの風見鶏」



ハンセン病の歴史を

人権尊重の教訓に

一九九五年九月二二日、
国立療養所多磨全生園、高
松宮記念ハンセン病資料館
を見学致しました。

ハンセン病患者に対して
不治の伝染病、遺伝病とし
て断種や強制収容がなされ
患者及び家族が様々な迫害
を受けてきたこと、病氣そ
のものの悲惨さについて学
びました。ハンセン病の歴
史は、人間が人間に対して

犯してきた過ちと人権抑圧
の歴史です。人間はなんと
酷く不条理な仕打ちをする
のか、憤りと悲しみとやり
切れなさを感じました。

しかしながら、患者救済
の為に一生を捧げられた宗
教家、医師、看護婦の業績
及び、全生園入園者と自治
会が全生園の土地の緑を地
域のオアシスとして市民に
受け継ぎ、ハンセン病の歴

史的教訓と一緒に生かされ
ていくことを念願している
ことについて、私は闇が深
ければ深いほど、光を増す
ような人間性の尊いものが
そこにあると感動しました。

ハンセン病の歴史を人権
抑圧の教訓とし、偏見差別
をなくしていく側に立つこ
とを肝に銘じました。また
この悲劇を生んだ「らい予
防法」の廃止と新法制定を
切望致します。

国際医療福祉大学
保健学部一年 大越友博

来館者の声

●看護婦 25才 女性
大変すばらしく、とても
勉強になりました。患者さ
んの苦しみがつたわってく
るような気がします。過去
だけでなく現在の患者さん
の状態など、どこまで医学
が進歩したのかを知りたい
と思いました。

●会社員 32才 男性
ハンセン病という病に対
して、愛の心で患者と接し
た人々の生き様に感動した。

●無職 67才 女性
ある程度のこととは知って
いるつもりで居ましたが、
プロミン以前の患者の状態
に胸が痛くなりました。

●学生 20才 女性
今回二度目だというのに、
やはり前回と同じようなシ
ョックを感じます。豊かで
あると言われる日本で、現
在も差別が続いているとい
うことはあってはならない
ことだと信じています。

早く差別的な法律がなく
なつてほしいという思いで
一杯です。

●無職 42才 男性
一言で言えない感動、一
粒の麦の味の深さが理解
できた様な気がします。

◎あとかぎ

今年是非実現してもらい
たいものは①らい予防法廃
止と新法制定②中山監督に
よる映画「見えない壁を越
えて」―声なき者たちの証
言―である。人間性回復へ
一步一步進もう。(修)

先駆者⑥

コン・ウォール・リー

一八五七―一九四一

属し、東京・横浜・沼津な
どを布教した。その間、熊
本の回春病院のリデルの経

女史は五九才の身をもって、
自分の生涯をらい患者と共
にする決意で、日本語教師
井上和子と草
津へ行った。

湯之沢の入
り口に草津町
伝道所「平和
館」を建て、二人の住居と

営事業や、好善社経営の目
黒慰廃園などのらい患者施
設を見学した。一九一六(大
正五)年四月二〇日、リー

「平和館」を建て、二人の住居と
した。バルナバ医院を中心
に一八ホーム、教会と学校
と保育所も開設し、彼女は

一九〇八(明治四一)年
五二才の身で単身日本に渡
った。そして日本聖公会に

と保育所も開設し、彼女は

瑞宝章が贈られた。

昭和一六年二月一八日、
八四才で昇天した。勲六等